

自然と共生する農業への歩みと鳥インフルエンザ災害 The impact of avian influenza in steps toward the harmonious agriculture with nature

岡島 賢治*
OKAJIMA Kenji

1. はじめに

持続可能な社会の構築が求められる現在、農業農村工学分野においても環境保全型の農業農村整備が徐々に進められている。これらの取り組みがさらに進められることで、水田は、田面、畦畔、周辺の用排水路やため池、雑木林等が有機的につながり、様々な生物の生息場所と食糧生産としての農地が共生する場となると考えられる。

このような自然と共生する農業をめざし、三重大学では、農業農村工学分野の学部生と教員の有志によって2013年度より「三重にツルを呼ぼうプロジェクト」を立ち上げ活動を開始している。この2014年度の同活動の取り組みにおいて、自然と共生する農業を目指す過程で図らずも鳥インフルエンザという生物災害を誘引する可能性が示唆された。

2. 三重にツルを呼ぼうプロジェクト

三重にツルを呼ぼうプロジェクトは、三重大学の農業農村工学系分野の学生・教員がともにできることを考え、実行していくことを目的に2013年に設立した活動である。このプロジェクトでは、自然と共生する農業をめざす指標種として、生態ピラミッドの比較的上位の大型鳥類であるツルを選択している。三重県は伊勢神宮を中心にツルの穂落とし伝説など、ツルとの歴史的な関わりがあり、古くから越冬の記録が残っている、しかし現在ツルの越冬はほとんど確認されていない。この背景には乱獲や農地のほ場整備等があるといわれている。このため、三重県で農業農村工学分野が中心となって自然と共生する農業を目指す指標としてツルは適していると考えられ、活動を開始した。

活動では、外部専門家による講演や学生と教員との勉強会で学生が主体となって課題を設定し、年間プロジェクトを立案し、実行するという形態をとっている。大学の地域貢献事業の助成を受けて、活動内容を毎年報告書にてまとめている。知見が蓄積しだい市民や学校へ向けて農業農村工学分野と環境への理解を促してしていきたいと考えている。

3. 鳥インフルエンザ災害と2014年度の活動

自然と共生する農業の指標として大型鳥類を用いている例は多く、宮城県蕪栗沼周辺のふゆみずたんぼによるガン・カモ類、新潟県佐渡市のトキ、兵庫県豊岡市のコウノトリ、鹿児島県出水市のナベヅル・マナヅルなどが有名である。これらの中で、ガン・カモ類、

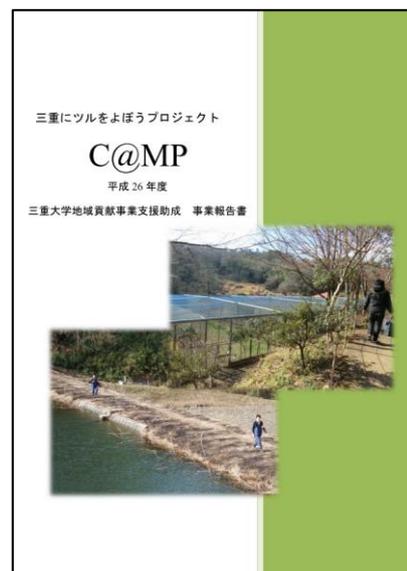


写真 1. 2014 年度報告書

* : 三重大学大学院, Mie university キーワード : アウトリーチ, 自然共生型農業, 鳥インフルエンザ

ナベヅル・マナヅルは渡り鳥であり，潜在的に鳥インフルエンザ災害のリスクを持っている．実際に鹿児島県出水市では平成 26 年度のツル越冬期間に断続的に鳥インフルエンザに感染したツルやカモが報告されている．

鳥インフルエンザ災害のリスクにおいては，野鳥の感染が確認されることで，周辺で飼育されている養鶏への感染，鶏肉・卵の安全性に関する風評被害，リスクは低いものの野鳥から人間への感染，愛玩鳥類への感染等のリスクがある．特に養鶏農家の不安は大きく，鹿児島県出水市では，平成 22 年度にツルの鳥インフルエンザ感染が確認されたあとに，出水市内の採卵鶏農場の養鶏に感染が確認され，約 8,600 羽の鶏を殺処分し，半径 10km 圏内のブロイラーと卵の移動を制限し，当時約 4 億円の被害を出している．このため，大型鳥類を指標として自然と共生する農業を模索している上記の各地域では，防疫訓練等も行っている．農林水産省では，野鳥等で感染が確認された場合，以下の対応をしている．①当該鳥類（その死体を含む）を確保した場所または当該鳥類を飼養していた場所の消毒および通行制限・遮断，②発生地点を中心とした半径 3km 以内の区域にある農場（家きんを 100 羽以上飼養する農場に限る）に対する速やかな立ち入り検査（死亡率の増加，産卵率の低下等の異状の有無及び飼養衛生管理基準の遵守状況の確認），③都道府県は，当該都道府県の職員で野生動物の事務に従事するもの（自然環境部局）及び家畜防疫員が相互に連絡し，及び適切に分担して，野鳥のサーベイランス検査を実施する．

2014 年度の三重にツルを呼ぼうプロジェクトの活動に際し，三重県農林水産部農業基盤整備課との議論の中で，上記の背景から畜産関係者からの指摘を受けてプロジェクト内容の再検討が必要となった．そこで，2014 年度は指標種を，鳥インフルエンザの感染リスクが低く，国内で渡りを完結させるか北海道にとどまっているタンチョウに改めた．また，学生によって活動目標がタンチョウの保全と自然と共生する農業の模索と再設定され，タンチョウ保全施設に必要な環境調査，タンチョウ保全施設があった場合の市民の自然環境への理解についてのアンケート調査とタンチョウ保全施設を持つ岡山県自然保護センターの視察および環境調査を行った．

4. まとめ

自然と共生する農業を目指していく過程で農村環境は，渡り鳥や野鳥にとっても改善されたものに変化していくと考えられ，このとき渡り鳥や野鳥の飛来することを防ぐことはできない．これからの自然と共生する農業の展開においては，鳥インフルエンザという生物災害について科学者，農業農村整備を推進する技術者，水田農家，養鶏農家，市民などとの綿密なリスクコミュニケーションが必要となると考えられる．2014 年度の三重にツルを呼ぼうプロジェクトの活動を通じて，三重大学の学生・教員，三重県農業農村整備技術者の間でこの問題を共有できたことは活動の一つの成果といえる．



写真 2. タンチョウ保全施設入口の消毒マット



写真 3. タンチョウ保全施設での環境調査